

# 「肩のリハビリテーションの科学的基礎」 によせて

第1巻の「ACL損傷予防プログラムの科学的基礎」に続き、1年を経ずして第2巻「肩のリハビリテーションの科学的基礎」が発売されましたことお喜び申し上げます。

スポーツによる肩関節外傷・障害の治療は、関節鏡の発達に伴いここ10年間で最も発展を遂げた分野といって過言ではありません。特に肩関節の手術件数は鰻登りに上昇し、いまやアメリカでは膝関節に勝るとも劣らない状態です。日本でもスポーツ整形外科を目指す若いドクター、トレーナーは膝関節以上に肩関節に興味をもたれる方々が多い状態です。確かに手術法の進歩はめざましく、昔は直視下で行われておりましたBankert手術や、腱板縫合術はいまや誰もが鏡視下に行うようになり、その手術成績も飛躍的に向上しました。しかしリハビリテーションや予防医学的観点からみると、1990年代からあまり大きな進歩がありません。その意味でSPTSの皆様が肩関節のリハビリテーションを取り上げられ、チェックされたのはまさにup to dateかと思われまます。

本書は5章に分かれ、肩のバイオメカニクス、外傷性脱臼、腱板損傷、投球障害肩、スポーツ復帰について述べられています。外傷性脱臼や腱板損傷はここ10年の関節鏡やMRIの発展によりその病態はじめて明らかにされたところで、担当者が上げられた文献はその病態を克明に記載したものが多くみられました。また肩関節の研究はやはりバイオメカニクスの手法が多く、特にロボットと屍体肩を利用した*in vitro*のバイオメカニクスや、いわゆる投球動作をはじめとしたスポーツ動作に関する*in vivo*での三次元的研究が注目を集めております。反対に競技現場での肩を脱臼した時の三次元ビデオでの解析や、グラウンドでの実際の投球ホームに関する三次元解析はあまりみあたりません。現状は病態が明らかになった割にはリハビリテーションの面や、障害の予防法についての新しいメニューが立ち上がっていないといえます。そのなかで井樋教授の肩外旋位固定は日本発の保存療法としては画期的なものです。投球肩のリハビリテーションや予防の面でも是非日本発の新機軸を打ち出していきたいものです。

投球動作の研究はパフォーマンスを上げる意味から昔からスポーツ科学者が研究してきた領域でもあります。今回の収集された文献はどちらかというと肩関節に限られ、体幹や下肢を含めた全身の投球動作に言及したものが少なかったのが気になります。今後リハビリテーションや再発の予防を考えていくためにはスポーツ科学者とも手を携え、SPTSの皆様を視野に入れたアプローチを期待したいと思います。

2009年1月

早稲田大学スポーツ科学学術院 教授 福林 徹

# スポーツ理学療法セミナーシリーズ

## 第2巻発刊によせて

SPTSはその名の通り“Sports Physical Therapy”を深く勉強することを目的とし、2004年12月から企画が開始された勉強会です。横浜市スポーツ医科学センターのスタッフが事務局を担当し、2005年3月の第1回SPTSから現在までに4回のセミナーが開催されました。これまでSPTSの運営にご協力くださいました関係各位に心より御礼申し上げます。

本書は2006年3月に開催された第2回SPTSを集約した内容となっています。文献検索は、発表準備時期である2006年1月前後であり、その後本書の原稿執筆準備が行われた2008年前半に追加検索が行われました。したがって、2008年初頭までの文献レビューが本書に記載されています。本書はこのトピックスの最終版ではないことは明白です。しかし、2008年時点での最新版といえる内容となっています。このレビューが、肩関節疾患のリハビリテーションにかかわる研究を開始する方、論文執筆中の方、研究結果から臨床的なアイデアの裏づけを得たい方、そして、何よりもこれからスポーツ理学療法の専門家として歩みだそうとする学生や新人理学療法士など、多数の方々の発展に寄与することを願ってやみません。

SPTSは何のためにあるのか？ SPTSのような個人的な勉強会において、出発点を見失うことは存在意義そのものを見失うことにつながります。それを防ぐためにも、敢えて出発点にこだわりたいと思います。その質問への私なりの短い回答は「Sports Physical Therapyを実践する治療者に、専門分野のグローバルスタンダードを理解するための勉強の場を提供する」ということになるでしょうか。これを誤解がないように少し詳しく述べると次のようになります。

日本国内にも優れた研究や臨床は多数存在しますし、SPTSはそれを否定するものではありません。しかし、“井の中の蛙”にならないためには世界のPTと専門分野の知識や歴史観を共有する必要があります。残念なことに“グローバルスタンダード”という言葉は、地域や国家あるいは民族の独自性を否定するものと理解される場合があります。これは誰かが1つの価値観を世界に押し付けている場合には正しい見方かもしれませんが、世界が求めるスタンダードな知識（またはあらゆる価値）が存在して世界がそれを求めている場合には誤った見方といわざるをえません。私たちのSPTSは、日本にしながら世界から集められた知識に手を伸ばし、そこから偏りなく情報を収集し、その歴史や現状を正しく理解し、世界の同業者と同じ知識を共有することを目的としています。

世界の医科学の動向を把握するにはインターネット上での文献検索が最も有効かつ効果的です。また情報を世界に発信するためには、世界中の研究者がアクセスできる情報を基盤とした議論を展開しなければなりません。そのためには、Medlineなどの国際論文を対象とした検索エンジンを用いた文献検索

を行います。MedlineがアメリカのNIHから提供される以上、そこには地理的・言語的な偏りがすでに存在しますが、これが知識のバイアスとならないよう読者であるわれわれ自身に配慮が必要となります。

では、SPTSは誰のためにあるのか？ その回答は、「Sports Physical Therapyの恩恵を受けるすべての患者様（スポーツ選手、スポーツ愛好者など）」であることは明白です。したがって、SPTSへの対象（参加者）はこれらの患者様の治療にかかわるすべての治療者ということになります。このため、SPTSは資格や専門領域の制限を設けず、科学を基盤としてスポーツ理学療法最新の知識を積極的に得たいという意思のある方すべてを対象としております。その際、職種の枠を越えた知識の共通化を果たすうえで、職種別の職域や技術にとらわれず、“サイエンス”を1つの共通語と位置づけたコミュニケーションが必要となります。

最後に、“今後SPTSは何をすべきか”について考えたいと思います。当面、年1回のセミナー開催を基本とし、できる限り自発的な意思を尊重してセミナーの内容や発表者を決めていく形で続けていけたらと考えております。また、スポーツ理学療法に関するアイデアや臨床例を通じて、すぐに臨床に役立つ知識や技術を共有する場として、「クリニカルSPTS」の企画を進めております。そして、SPTSの本質的な目標として、外傷やその後遺症に苦しむアスリートの再生が、全国的にシステムティックに進められるような情報交換のシステムづくりを進めてまいりたいと考えています。今後、SPTSに関する情報はウェブサイト (<http://SPTS.ortho-pt.com>) にて公開いたします。本書を手にした皆様にも積極的にご閲覧・ご参加いただけることを強く願っております。

末尾になりますが、SPTSの参加者、発表者、座長そして本書の執筆者および編者の方々、事務局を担当していただきました横浜市スポーツ医科学センタースタッフに深く感謝の意を表します。

2009年1月

広島国際大学保健医療学部理学療法学科 蒲田 和芳